

『韓国の集合住宅における住棟共用空間の形態と利用実態に関する考察』

どのような研究か

集合住宅は、多数の世帯が集まって住む居住形式である。しかし、現代都市においては個人主義や合理化が進み、プライバシーが守られる一方、生活はドアで閉鎖され、孤立している現状がある。筆者は、このようなコミュニティが欠如した生活に問題意識を持ち、この原因のひとつは共同生活への配慮を欠いた集合住宅の平面計画にあるとして、近隣との付き合いの場となりうる共用空間のあり方を明らかにしようとしている。

韓国の近年の集合住宅7事例を取り上げ、現状の共用空間（玄関前・廊下・階段室・EV・EVホール）の利用実態を、観察およびヒアリング調査により把握し、共用空間の縦動線の配置形態の違いに着目しながら分析を行っている。

なにが得られているか

筆者の挙げる結論は以下の通りである。

- 1) 共用空間の縦動線配置形態を「Core型」「階段室型」「各階通路型」に分類して分析すると、グループごとに空間の利用目的・満足度等が類似しており、計画を行う際に各形態の持つ空間の性格に注目する必要がある。
- 2) 他より専用面積が狭い「各階通路型」において、共用空間へのあふれだしが多く見られる。
- 3) 共用空間が通路以外に、現状でも近所の人と話をする場所として利用されていることから、積極的に活用する必要がある。
- 4) 今回調査事例の縦動線配置形態ごとの満足度と機能変更への要求度の関係のまとめ

共用空間の利用として併記している項目には、積極性のあるあふれだし（植木など）と居住空間の狭さが原因のあふれだしがあり、分析においては区別する必要がある。この区別無く、現状の利用度と満足度を、相関させて評価するのはよくない。屋外や、低層部にある施設を今回は無視しているが、実際は居住者の満足度やコミュニティの形成には影響があると考えられ、関係を考察する必要があると思われる。

現状では、問題点が結局はつきりしない部分が多く感じる。ヒアリング調査なので、より詳細な内容を聞くとよかった。例えば、共用空間を機能変更したい場合、具体的などその理由が知りたい。また、ご近所との会話は、共用空間のどこで、誰と（どこの住戸の人？）、どういう場面で（ふとんを干している時など）などを聞くとよいのではないかと。平面計画のあり方を提案する上で、詳細な個別事例の把握・分析は、貴重な資料と成り得たと思う。

どのような価値や意義があるか

韓国の現状の集合住宅が、コミュニティへの配慮を欠いた計画であることを問題として指摘し、コミュニティの形成が可能となる共用空間のあり方を探るという視点で、研究を進めていることに意義がある。

共用空間の計画が、どうあればコミュニティの形成が可能となるかという具体的な部分については、今回の調査のみでは不十分であり、より詳細なヒアリングや観察による分析があればよかったと思われる。今後調査・研究を進めれば、韓国の集合住宅計画のあり方を見直す中で価値ある論文となると思う。

感想

今回の調査対象事例の写真を見る限りでは、筆者が問題としている「孤立し閉鎖的になりがちな集合住宅」を調査しているように感じられた。この現状把握のみでは、失われてしまった共同生活を捉えることができないと思う。まだ豊かな共同生活が残っている住宅地から生活行為要素を抽出し、今回調査事例との比較をすれば、現状の集合住宅では失われている行為・今後求められる空間の分析ができるのではないかと思う。

分析の際に使用する図面が、共用空間と住戸内部が別に掲載されているものがあったが、生活を考える上では、合成してひとつの平面図として見る方がよいと思う。

韓国の高層住宅で、かつ各戸面積 100m<sup>2</sup> 以上で階段室型が多いというのは、日本ではほとんどないと思うので、とても興味深い。廊下にドアをつけて専有化することが違反でないなら、その点も日本と異なっていて驚いた。

木原

どのような研究か

従来の大規模高齢者福祉施設は、高齢者の生活空間とはなりにくく、また入居の為には住み慣れた地域を離れなければならないことが多い。施設に入ることによって、高齢者の生活に落差が生じ、それが痴呆などを進行させる原因ともなり得る。

本研究はこのような問題意識から、高齢者がこれまでの日常生活と違和感の少ない生活を送ることができる例として、住宅を転用した小規模施設に注目した。そして、具体事例を比較・分析することにより、住宅を施設に転用することによって生まれる、生活環境としての魅力を明らかにしたものである。

何が得られていたか

バリアフリーへの配慮と住宅らしさの保持

バリアフリー化を最小限に留めることで、住宅らしい雰囲気を保っている。また、利用

者の残存能力が保たれる。

#### 利用者の行動と空間の関係

空間の特性や場のしつらえが、利用者の様々な動作、姿勢を促している。利用者にとって馴染み深いものが、利用者の安心感や懐かしさを引き出す重要な役割を果たしている。小規模であることが利用者、スタッフ間に密接な関係を作っている。

#### 近隣との関係

施設側から積極的に働きかけていくことで、徐々に地域に根ざしている。

#### どのような意義があるか

高齢者が、これまで積み重ねてきた日常生活と違和感の少ない生活を送ることのできる施設の魅力を探る本研究は、今後ますます必要となる高齢者施設に関する研究として、また従来 of 施設に問題を提起するものとして重要な意義をもつ。

#### 感想

着眼点が非常に良いと感じた。施設に対する問題意識から明らかにしたいことを明確に認識し、それに沿って結果が導き出せていると思う。住宅転用型であることの魅力がよく分かり面白かった。結果で得られた三つの視点における本事例と大規模施設との比較、利用者のそこでの生活に対する意識の比較などができたら、住宅転用であることの良さがよりはっきりするのではないかと思う。ぜひさらに面白いものにしてほしいと思った。